

裾分一弘先生との2泊3日

永田和弘 平成11年7月18 - 20日

私が裾分先生のお宅を伺ったのは1996年の初秋でした。裾分先生は間近に控えた歯学史学会で「レオナルド紀行 --- ウィンザー城王室図書館蔵『解剖手稿』について」を特別講演されるということで準備の真っ最中でいらっしゃいました。

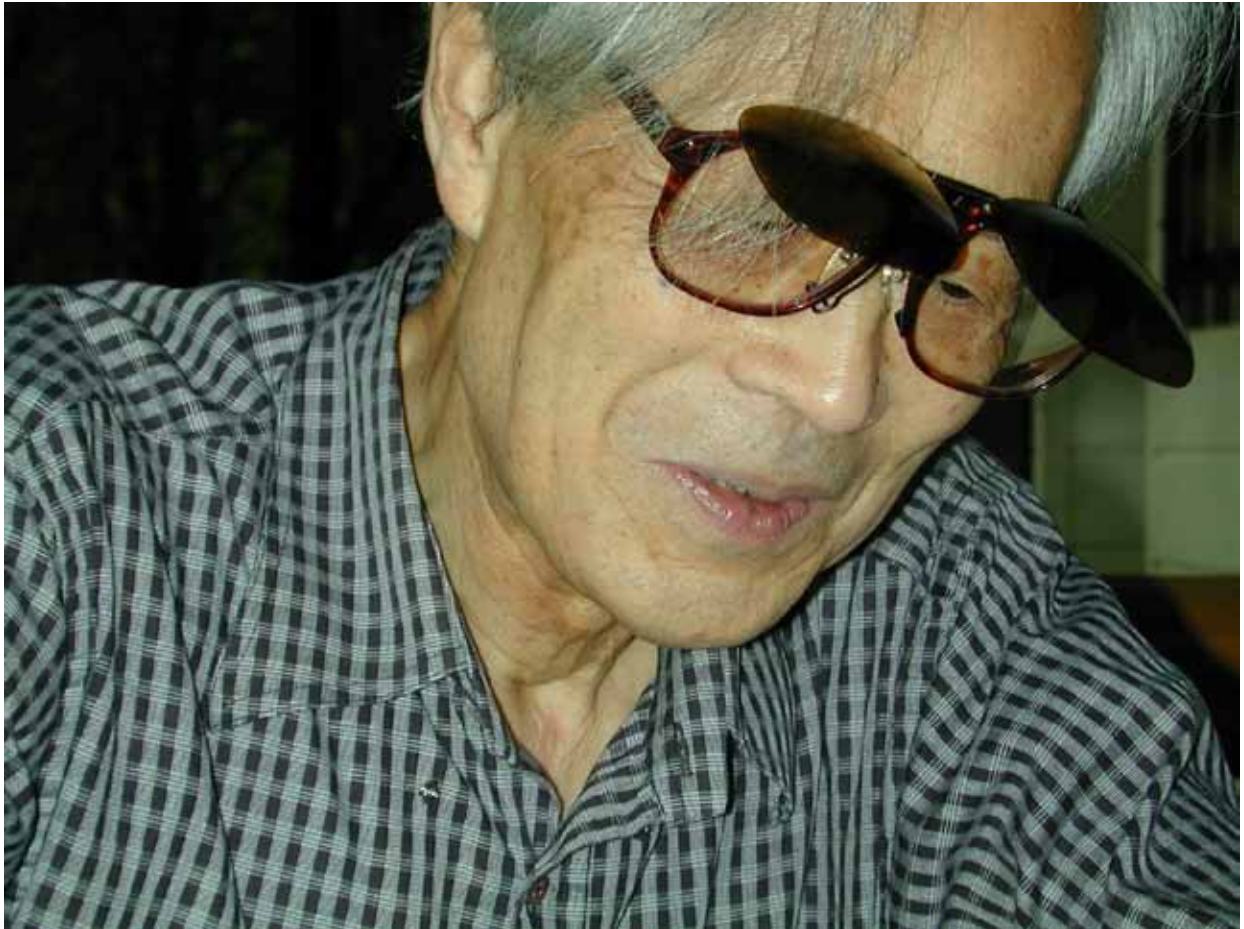
当時、私はレオナルドの「心臓と血液の運動」に興味を持ち「レオナルドの心臓」という小論をまとめていました。一介の歯科医にしか過ぎない私のレオナルド論ですが、歯科医の自分だからこそ見えてきたという自負から情熱を込めて書いたものですし、また読んで頂ける人を探していたのでした。私が裾分先生を知ったのは『レオナルド・ダ・ヴィンチの「絵画論」攷』（中央公論美術出版社）によってでした。その著書は決して大部といったものではありませんが、その内容は憶測をはさまず確かな根拠を積み重ねて論拠と思想を展開するといった極めて高度な学術書でした。レオナルドを問うのであれば、私には裾分先生しかいらっしゃらないと確信し、先生を訪問したのであります。

折しもその時には先客が居られて、先生のお弟子さんでご自分の研究のアドバイスを受けておられました。私は後ろからお二人の姿を拝見していたのですがその時の裾分先生の言葉にお弟子さん共々私も頭を深く下げて聞いた言葉があります。「美術史の目的は作品の技術的・社会的な研究だけではなく、作品には作者の人格や置かれた社会状況が現れているはずだからそこに立脚した研究でなくてはならない。人が現れていなくてはいけない。」

著書によって感じた時の裾分先生の第一印象を申し上げるならば、直感だけでは語らない理性的な学者肌といったところですが。しかし、上記で紹介させて頂いたように先生の基本は作品を通した「人間理解」です。一口に「人間理解」といっても、美術史の上で文化も時代も異なった作者をどのように理解するかという問題があります。これは歴史を取り扱う際の根幹にかかわる困難な問題です。これには解釈の問題が介在し、実証できる資料の積み重ねだけからでは到達のできない感性の世界が用意されねばなりません。作者を理解できるかどうか、そのように理解した自分の理解をまた他者によって理解してもらえるかどうか --- これは自分の感性が作者や他の人たちの感性とどこまで共感できるかに関わってくる問題です。歴史家・美術史家は理性と感性とを兼ね備えてはいけません。裾分先生の魅力は正にそこにあります。尤も、先生のお人柄や奥様とのご夫婦愛は更に近づく人を魅了することになるのですが....。

著書・論文からでは判らない、接して初めて判る先生の人的魅力の部分。それがこのような数枚の写真によって断片にせよ紹介できるのであれば有意義なことと思われまふ。冷徹な学問に「人間の血のぬくもり」を通わせ、理性と感性の断絶に橋を架け、先生ご本人は孤独行を歩まれるが人には優しく、レオナルドに生涯を懸けて「レオナルドを知ることはすべてを知ることであり」と世界にも例をみないレオナルド学を樹立された裾分先生の人的部分を紹介します。

台風接近の心配の中、裾分先生と私は先生の参科の別荘で7月18日から20日までの3日間を過ごすことになりました。これらの写真はその時の先生のスナップです。



レオナルド研究は第三期に入った

「レオナルドの研究史は3段階に分けることができる。第一期はヴァザーリらに代表される「伝聞による収集の段階」。第二期は「美術作品の研究の段階」で絵画に限らず彫刻、建築までレオナルドの本格的研究が始まる。これは多くの人々により長い間続いた。この第二期の後半である歴史の世紀19世紀に入ると手稿などリテラル（文章）の公刊と研究が始まる。ヒルデブランドはその代表的な研究者である。第三期はペドレッティらに代表される「実証に基づく検証の段階」でレオナルドの全てが科学的検証の対象となった。私はその第三期を私なりに集大成したいと考えている。この段階は単なる科学主義ではなくて「資料に基づいてレオナルドの人間性を追求する段階」として捉えたい。いま世界はやっとこの第三段階に入ったばかりである。」

裾分先生は長身でいらっしゃり他人の悪口は一切言われぬ。一方で、学問的な批判は明瞭に判断を示される。感情を差しはさまず理性的である。実は、このスタイルはレオナルドである。レオナルドを研究して50年。だから似てきたのか、それとも性格が似ていらっしゃるからレオナルドが好きになり理解ができたのか。先生を見ているとレオナルドもかくであったらうという気持ちになってくる。

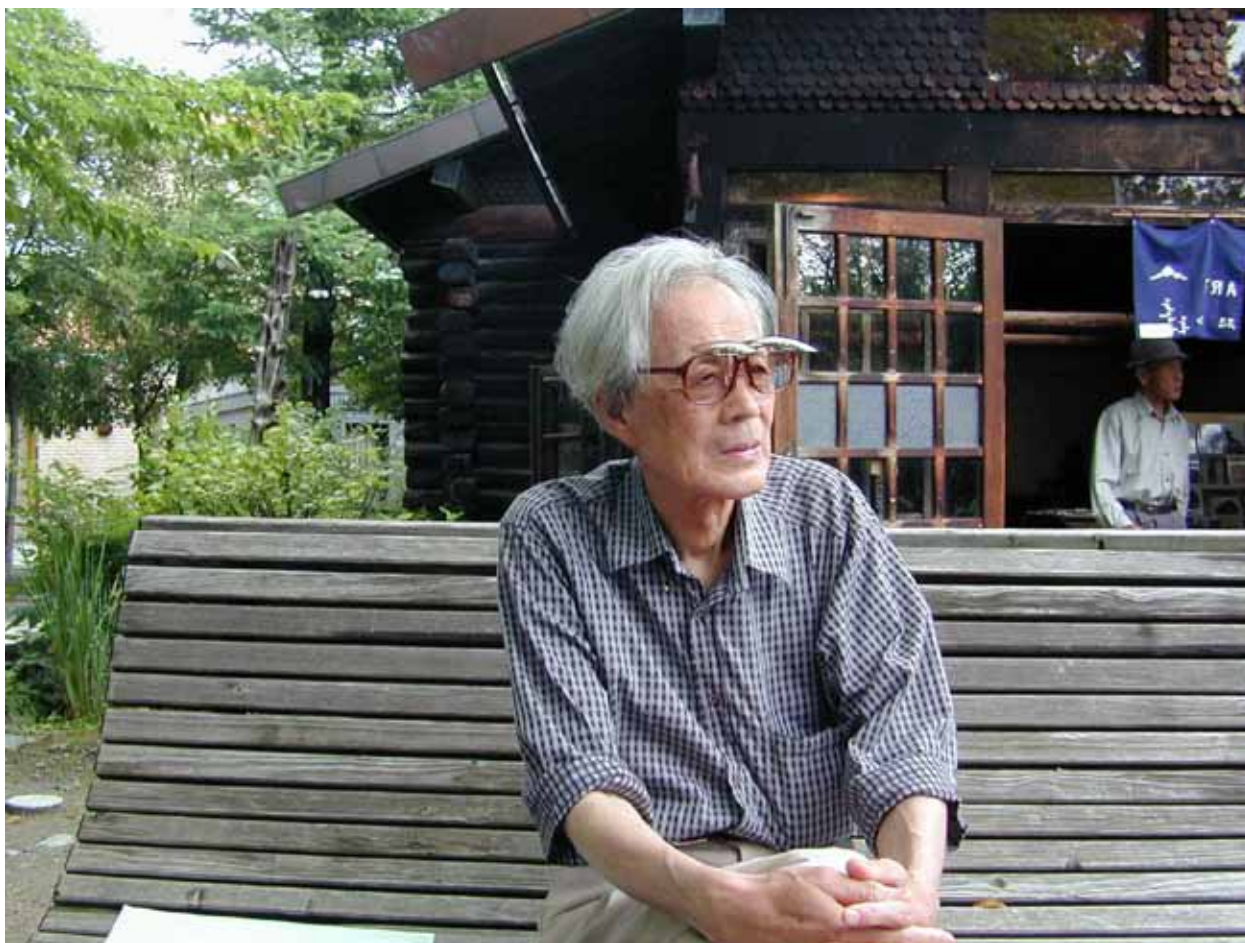


私の目指すところは美術史ではなく、美術史学である

「今までの美術史は余りにも学問的には低く見られてきた。これでは若い人が育成しない。哲学は美学を蔑み、その美学は美術史を蔑んできた。しかし、絵画は時として哲学よりも雄弁である。美術の歴史を通して人間の歴史を語ることができる。精神史としての美術史。これは現在の美術史学に課せられた古くて新しい課題である。」

レオナルドの言葉に「眼から入れるべき事柄を耳から入れようとはするな。眼から入った事柄を口から出そうとはするな」がある。例えば、デューラーの「エラスムス像」が無ければ我々は文章だけからではエラスムスの姿をを想像することすらできなかったであろう。デューラーの写実の向こうにある事柄、見た物をそのまま描くのではなくその背後の真理を描けと言ったレオナルド。ビジュアルな哲学は今リテラルな哲学を変革しようとする時代に入った。

7月19日曇り



恐ろしいほどに勉強をしている

荻原碌山美術館にて

荻原守衛（雅号：碌山 1879-1910）は若くして亡くなっている。私は碌山の名を知らなかったが裾分先生に紹介されて芸術というものは作者の生死を懸けた対象であることが実感された。そして、単に作者の感性だけで作品ができあがるのではなく、普段から実に多くのことを勉強しているのだということを知った。碌山の蔵書の中にはミケランジェロやレオナルドその他多くの芸術家に関する洋書がある。碌山美術館（長野県南安曇郡 Tel: 0263-82-2094）には主として彫刻が展示されているが、碌山のスケッチなども物の見方の参考になろう。



「女」
荻原守衛
1910



H98. 0cm

レオナルドは永遠の孤独である

「レオナルドはルネサンスを代表する「万能の天才」の威名を欲しいままにしている。しかし、真のレオナルドを理解する者は極めてわずかである。500年を経て、レオナルドの心の苦悩を理解する人がレオナルド研究者の中にさえ少ないことを思う時、レオナルドを研究することは別の意味を帯びてくる。一つは従来通りのレオナルドの研究である。もう一つは、従来の先入観と闘う自分自身の観察である。」

「お前のためにのみ私の時間はある」という謎めいた文がレオナルドの手稿中にある。

この「お前」は「解剖」を指しているのではないかと裾分先生は考えて居られる。事実、レオナルドは彼の生涯1452 - 1519の内、最後の20年のほとんどの時間を解剖に割いている。解剖を万能の天才の余技の一つとして考えてはいけない。解剖に関しては素人であったレオナルドが1513年頃には当時の解剖学を凌ぎ批判するまでに進展していくという過程は感動を覚えるドラマである。そして、解剖学のドラマはその時々、の絵画制作に深く関連していくことになる。いわば、「レオナルドの解剖学」の理解無くして「レオナルドの絵画」の理解はあり得ない。しかし、レオナルドの研究者で「レオナルドの解剖学」に立ち入る人は少ない。最近のペドレッティらの「レオナルド 解剖手稿」にも肝心の部分で修正が必要ではないかと思われる箇所が散見される。500年を経た今でさえレオナルドの解剖学は封印されたままとってよい。



レオナルド研究はレオナルドの原典から

「レオナルドは 11 枚の絵画と約 8000 ページの手稿を残している。レオナルドの研究はこれらの原典から研究されねばならない。翻訳や他人の紹介記事から判断をしてはならない。しかし、レオナルドの原典が正確にどれぐらいの量で何処にあるかは実は未だに明確ではない。私（裾分）はそれを明確にしようとした。これは基本中の基本事項でありながら、世界の誰もが未だに手を付けていない研究で、この研究は苦行ともいえる困難さを伴った。要求されるものは間違いじみた熱意と体力であった。」

裾分先生のこの言葉に私はレオナルドの一文を思い重ねてしまうのである。「私を妨げるのは怠惰ではない。時間である。」レオナルド研究に先生の生涯を捧げてこられて今 76 才になられた。最後の集大成として先生の「レオナルド研究」が完成間近である。人と才と年とを思うとき、先生の「レオナルド研究」は奇跡の書と言ってよい。



ウルビノ稿本はレオナルドの正確な写本です

「レオナルドの自筆の手稿は約 8000 ページが現存していますが、ウルビノ稿本と照合することができる現存の原手稿は 4 分の 1 でしかありません。つまり、4 分の 3 は失われてしまった手稿で我々はウルビノ稿本を通じてしか知ることができません。ここで問題なのは、原手稿と照合できないウルビノ稿本は正確な写本かどうか、つまり、レオナルドの手稿と見なして良いかという問題です。私は照合可能な 4 分の 1 の現存手稿をウルピノ稿本から正確に手写されているかどうかを一字一句付き合わせてみました。すると、恐るべき厳格さでウルビノ稿本は手写されていることが分かりました。ウルビノ稿本はレオナルドの正確な写本で、ウルビノ稿本によって我々は失われたレオナルドの手稿の数を少しは取り戻したと言って良いでしょう。」

私はレオナルドの残された手稿が 8000 ページにのぼることの量の多さに驚き、それでもって照合できるのは 4 分の 1 でしかないことに更に驚き（このことから、原手稿は 20000 ページにのぼるといふ推定もある）、これで終わりかと思いきや、ウルビノ稿本を手写する事業にもって来たメルツイの厳格さに驚き、そして最後にすごい驚きが私を捉えた。裾分先生はウルピノ稿本の一字一句をコピーにとり、現存する手稿のコピーと照合されたのである。私はその膨大な資料を見せていただき、それを前に先生の情熱と根気に感服してしまった。「ウルビノ稿本はレオナルドの正確な写本です」と言われるときの言葉の重さは並ではない。学術とはかくの如きかと思つた次第である。なお、『レオナルド・ダ・ヴィンチの「絵画論」攷』（中央公論美術出版社）は昭和 52 年の出版であるが、学術を目指す人には学術本の見本として推奨したい。出版社（03 - 3561 - 5993）には未だ残部があるとのこと。

7月20日曇



『東洋美術論考』中央公論美術出版 1973

私の恩師は谷口鉄雄先生です

裾分先生は寡黙でいらっしゃる。私には歯がゆい気持ちがするくらいである。レオナルドのためにもレオナルドの重要性やご自分のご研究をもっと積極的に世に問われればよいのと思う。しかし、先生は笑って「性分でしょう。私にはそれはできません」とおっしゃるだけである。「私の恩師は九州大学の中国美術の谷口鉄雄先生です。先生は寡黙でいらっしゃったが、その著書は内から光り輝いていました。私の書物もそうありたいものです。」

裾分先生のお口からは谷口鉄雄先生の名前がよく出てきた。尊敬とか私淑というよりはなんとか谷口先生に追いつきたいという願望が強く感じられた。

「私は谷口先生から大事に育てられました。本当は私は谷口先生の後を引き継いで中国美術をするべきだと思いましたが、私はレオナルドの方向に進んでしまった。申し訳ない。谷口先生の心中はとても寂しかったのではないのでしょうか。」

裾分先生の学問の特徴は「原典に戻れ」です。一切の風聞・批評を排除して、「本当の事実はどうなのか」で組み立てられています。しかし、冒頭でも紹介したように、先生の著作には「如何に客観的事実を並べてもそれだけでは美術史にはならない。そこに「人間」が現れていなければいけない」が貫かれています。これはなんと、谷口鉄雄先生の信条でありました。『東洋美術論考』に明確に書かれています。分野は「中国美術」と「レオナルド」と違いますが、学門の屋台骨はしっかりと継承されています。谷口先生は喜んでおられたのではないのでしょうか。そして、その屋台骨を私の「歯科医学史」に引き継いでいこうと思います。



終わり

裾分先生と筆者

レオナルドと聞けば、誰でも「モナ・リザ」や「最後の晩餐」等の名画を思い浮かべるでしょう。レオナルドには、実は美術作品のほかに、彼の座右にあった手稿、素描・素画の類が約四千紙葉(八千ページ)遺されていて、文字通り貴重な世界遺産として欧米諸国に伝えられています。

この遺産は、19世紀以降徐々に整理され、出版されて、レオナルドの実像が次第に明らかになって来ました。彼は決して万能の天才ではなく、むしろ孤独に耐え、清貧に甘んじた努力の人であったことが、紙葉の端々に見えています。

展示されますのは、翻刻を添えたファクシミリ版の全冊と、ほかに関連する周辺の初期活字本(インクナビュラ)若干です。この種の展示としては、世界最初の催しだと思えます。



裾分一弘 (すそわけ かずひろ) 学習院大学名誉教授

Profile

1924年岡山県倉敷市に生まれる。九州大学文学部美学・美術史学科大学院を中退。学習院大学助教授、教授を経て、1995年同大学名誉教授、同時に安倍能成学術賞を受賞。この間、東北大学、東京大学、北海道大学、慶応義塾大学等の非常勤講師、最高裁判所考試委員、ジェノヴァ大学客員教授等を歴任。レオナルド研究所(ブレッシア市)より、ナンド・ド・ドニー賞を受賞。

著書・訳書に、「イタリア・ルネサンスの芸術論研究」、「レオナルドの手稿、素描・素画に関する基礎的研究」(何れも文科省出版助成費による出版)〔中央公論美術出版〕、「レオナルドの解剖手稿」、「レオナルドのパリ手稿」(何れも分担訳)、「ウインザー収蔵のレオナルド素描集第I、II輯」(監修並びに分担訳)〔以上岩波書店〕等。

明治大学商学部「Project101知の融合と創生」事業

「レオナルドのもう一つの遺産」展

—「レオナルドの手稿」(ファクシミリ版)とルカ・パチョーリとの共同研究を中心に—

〔会期〕 2006年8月23日(水)～9月24日(日) 10:00～16:30 (※入館は閉館の30分前まで)

〔会場〕 明治大学博物館 特別展示室 (アカデミーコモン地下1階)

〔入館料〕 一般・大学生600円(500円) 小中高生400円(300円) 小学生未満 無料

※()は前売り料金〔特別枠〕明大生、リパティ・アカデミー会員 400円(当日前売とも。大学院生を含む) 千代田区内在学の小中高生 200円(当日前売とも。在住は含みません)千代田区広報に掲載予定のクーポン提示

裾分一弘先生の Profile

(明治大学商学部「レオナルドのもう一つの遺産」展(2006)より)